

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価（3月31日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①アクティブ・ラーニングの視点とユニバーサルデザイン授業の視点により、ハイテンポで「力の付く授業」を構造化する。 ②科学的・論理的な思考力・判断力・表現力・問題発見・解決能力（探究力）、自学力を育成する。 ③「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実により能力を伸長させる。	①公開研究授業や研究協議を通して、「個→協働→個」「内化→外化→内化」の構造を持つ授業に組織的に取り組み、思考力・判断力・表現力を高める。 ②③情報利活用推進委員会及び理数教育推進プロジェクトチームの活動の充実を図り、組織的な授業改善や探究的な学び、一人一台端末の活用の充実を図る。	①各授業において、本時の目標となる「問い」＝思考・表現・判断を伴う「問い」の工夫を行い、グループワークの充実を図る。 ②令和7年度から設置する理数探究基礎の学習内容、授業形態等を決定する。 ③スマートフォンではできないICT機器を活用した学習活動を促進し、組織的に授業改善を行う。資料や説明スライドの提示や読解、授業のまとめの文章入力、Google Workspaceの利用による協働学習等、一人一台端末の活用の拡充を図る。	①生徒による授業評価項目5（他者との思考の共有・深化について）及び6（課題解決について）の「4」の回答が40%以上になったか。また、能力育成の指標の1つとして、ルーブリック評価を活用できたか。 ②理数探究基礎の学習内容、授業形態等を決定できたか。 ③生徒による授業評価項目8（ICTの活用について）の「4」の回答が40%以上になったか。	①授業評価項目5及び6の「4」の回答がそれぞれ41%、43%となり、各授業において思考力・判断力・表現力を高める活動が実践されている。「個→協働→個」「内化→外化→内化」の構造を持つ授業づくりに組織的に取り組み、11月の研究授業実施後の教員アンケートの結果からも、授業改善への知見を得ることができたという回答が多数を占めた。また、生徒の授業の振り返りにルーブリック評価を活用した。 ②理数探究基礎の授業形態等を決定できた。 ③授業評価項目8の「4」の回答は39%と目標にああと一歩及ばないものの、タッチペンの導入等により着実に一人一台端末の活用は進んでいる。	①③アクティブ・ラーニングの視点とユニバーサルデザイン授業の視点及び教科における探究的な学びを深める必要がある。新たな試みとして、各教科の生徒による授業評価アンケートの結果の3年間の推移に着目し、分析を行い、授業力向上に向けた具体的な手立てについて検討し、次年度の授業実践における組織的な授業改善を図る。また、ルーブリック評価の手法を研究していく。 ②次年度については、令和7年度生の2年次の理数探究について、授業形態等を決定する。	①②③アンケート（魅力と特色ある県立高校づくり・生徒による授業評価）の結果や日々の教育活動を通じて、教職員が地道に取り組んだ努力が成果として現れている。	①研究授業や研究協議、授業実践を通じて、生徒による授業評価の結果を基に、生徒の資質能力および教員の授業力の向上が組織的に図られた。また、ルーブリック評価を活用した。 ②理数探究基礎の授業形態を決定することができた。また、教員研修などを通じて、仮説の重要性など、科学的な視点を持つことができた。 ③資料のPDF化やタッチペンの導入により、一人一台端末の活用が進展した。	①各教科で検討した授業力向上のための具体的な手立てについて、計画的かつ組織的に実施する。 ②SSHの指定に向けて、組織体制を確立、申請の準備を加速させる。書の作成、2年次の理数探究に関する授業形態の決定を行う。また、各教科における探究的な学びを一層深めていく。 ③情報利活用推進委員会及び各教科において、BYOD 端末を使った学習活動を促進し、生徒による授業評価の数値の向上や組織的に授業改善の機運を高める。
2	生徒指導・ 支援	●「全ての生徒は支援を必要としている」という「神奈川の支援教育」の原点に立脚し、あらゆる教育活動を「支援」の視点から充実させる。	●「過ごしやすい学校生活」を送るために社会生活上での規範意識やマナー等、自己指導能力の育成を図る。様々な課題を持つ生徒へ適切に対応するため、教育相談体制を充実させ、報告、連絡、相談が円滑に行われるようにする。	①自転車乗車時のヘルメット着用の啓発や登下校時の交通安全指導の充実を図る。 ②情報モラル教育を進めるとともに保護者の理解を促進する。 ③SSW やSCと連携し、プッシュ型面談等を通し、生徒との面談の確保を図り、生徒理解に努める。	①自転車通学における安全運転への意識やヘルメットの着用率、マナーが向上したか。 ②SNS 利用に関し、生田メディアポリシーを理解させ、情報モラルに対する意識を育てられたか。 ③サポートドックを活用し様々な問題を抱える生徒に対応できる相談体制、相談室の整備ができたか。また、学年会が情報の共有化にとどまることなく、ケース会議的に行われたか。	①自転車運転免許証を発行して交通ルールを守るように指導した。また、PTAと協力して年2回近隣の交差点等で交通安全指導を行った。 ②SNS等での誹謗中傷やいじめにつながる書き込みについて、1年生を対象に研修会を実施し、情報モラルに対する意識を高めた。また全校集会でも同様に理解を深めた。 ③サポートドックを実施して回答結果からプッシュ型面談を行うなど、様々な問題を抱える生徒に対応できる相談体制を充実させた。SC、SSWの来校日を生徒・教員に周知し、毎週学年会や生活支援グループでケース会議的に情報共有をした。	①自転車事故は、3件と減少したが、通学時の自転車事故を未然に防ぐために引き続き、入学時に交通ルールの筆記試験や交通安全講話、PTAと協力した自転車点検を実施する。道路交通法改正を受けて、安全運転・交通ルールを遵守させる指導及びヘルメット着用を促す指導を推進する。 ②大人の目に触れにくいSNSの利用について、引き続き情報モラル教育を推進していくとともに、保護者の理解と協力を得て取組の効果を高める。 ③サポートドックで生徒が抱える不安や悩みを確実にキャッチし、様々な問題を抱える生徒にSC・SSWと教職員が情報共有して組織的に対応していく。生徒相談体制を一層充実させ、安心して学校生活を送ることができるようする。	①多摩地区では自転車事故が多くなっている。また、学校付近の歩道が狭く交通量も増えているので、更なる自転車運転マナーの向上や交通事故防止の指導をお願いしたい。	①交通安全指導や交通ルールテストを実施して交通ルールの順守やマナーの向上を図った。ヘルメットの着用については課題が残る。 ②SNS等での誹謗中傷やいじめにつながる書き込み、無断写真撮影・掲載について、随時ホームルームで指導を行うとともに、全校集会を通じて意識を高め、理解を深めた。 ③サポートドックを実施し、SSW 及びSCと連携して、教育相談に対応した。また、各学年会で必要とされる生徒に関する情報を共有し、生徒理解を深めた。	①自転車でのヘルメット着用を促進する具体的な方策の検討や、PTA および百合丘高校との合同交通安全指導を通じて、登下校時の交通安全指導を一層充実させる。 ②LHR などにおいて外部講師によるワークショップを実施し、情報モラル教育を推進するとともに、保護者の理解を促進する。 ③プッシュ型面談を通じて、SSW およびSCとの連携を強化し、新たに面談週間を設けることで、生徒との面談時間を確保し、援助ニーズの高い生徒にきめ細かな支援を行う。

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月10日実施)	総合評価(3月31日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	①あらゆる角度から能力を伸長させ、「不確実で複雑な時代」を生き抜く「主体的な意志のある自立した『個』」の基盤を育成する。 ②能力伸長を当面の進路希望に結実させる。	①理数教育を推進するために、学際的なテーマの授業等を通して、「総合的な探究の時間」と各教科・科目との連携をさらに深める。 ②能力伸長を促進するために、面談を活用した進路指導の充実を図る。	①各教科・科目の学びを探究的活動につなげる。また、ICT機器を活用して言語能力、情報活用能力を育成する。 ②面談については担任の負担軽減や質の向上に向けて、指導のポイントの共通化を進める。	①「総合的な探究の時間」と各教科・科目との連携がどの程度できたか。 ②面談内容の共通化や質の向上が図れたか。	①昨年度から「情報Ⅰ」「数学Ⅰ」については、探究活動で必要な知識・技能を適切なタイミングで指導できるよう再調整した。また新たな試みとして、2学年では、KSP(かながわサイエンスパーク)と連携することで、生徒が研究者を直接訪ねて個別にアドバイスをもらったり、本校向けのワークショップを企画・開催したりすることができた。1学年では全科目で探究活動との連携を呼びかけることで、7教科15分野において教科横断型で文理両道を体現する探究グループを立ち上げることができた。 ②各学年に「面談で取り扱う内容(進路・生活等)」を事前に提示し、全ての担任が生徒と話す内容(必須事項)を明確にして面談に臨むことで、組織的に対応し、進路指導の充実を図った。1学年では新たに「学年・クラス懇談会」を開催し、学校や学年の方針を一齐に保護者へ説明したり、クラスの保護者同士の情報交換を円滑にしたりすることで、担任の負担軽減と進路指導の質の向上を両立させた。	①各教科・科目の学びを通して科学的・論理的な思考力・判断力・表現力を育成する取組を進めていく。まずは、「本時のまとめ」「単元のまとめ」等に探究の視点での「問い」を設定することを心がける。また、KSPとの連携では、事前・事後の生徒指導を行い、より深い学びにつなげていく。 ②面談実施後の情報収集を行い、どのような面談が必要かつ効果的なのか検討する。	①明治大学との高大連携事業において、生徒の積極的な参加を促進してほしい。探究活動における連携が深まっていることは非常に良い流れである。	①教科横断型で文理両道を体現する探究グループを立ち上げた。各教科・科目における探究的な学びの実践を図る必要がある。探究活動においてKSPとの企業連携、明治大学との特別講義、大学生による探究活動の助言指導を通じて、生徒の探究活動が深化した。 ②面談内容の共通化・明確化を行い、組織的に進路指導を充実させた。1学年は懇談会を開催し、保護者への説明と情報交換を円滑にし、担任の負担軽減と進路指導の質向上を両立させた。	①各教科・科目において探究的な学びの実践を行う。新たに実施する理数探究基礎において、仮説検証型の探究活動のプロセスを確立し、生徒の科学的論理的思考力や問題解決能力を養う。 ②新たに面談週間を設け、生徒や保護者に対してより効果的な内容や情報提供を検討する。また、担任の負担軽減や面談の質向上を図るため、開催時期や副担任の関わり方を具体化することを検討する。
4	地域等との協働	●保護者等、地域の方、学識経験者などの学校運営参画を促し、育てたい生徒像の共有と実現、学びの充実、資質・能力の育成を図り、社会に開かれた教育活動を実現する。	●地域との交流を促進し、社会に貢献する資質能力の育成とコミュニケーション能力、協働的な姿勢を育成する。	①学校運営協議会の活動を活性化させる。 ②地域貢献活動を全学年で実施する。また、新しい地域交流のあり方を検討する。	①学校運営協議会を通じて、委員の方に学校運営に参画してもらうことができたか。 ②地域貢献活動を実施できたか。新しい地域交流のあり方を検討できたか。	①全3回の学校運営協議会では、学校運営について、多岐にわたる意見を頂戴し、連携を深めた。 ②地域貢献活動(地域の清掃活動)を全学年で実施し、学校全体で地域の一員として社会に貢献する態度や資質能力を育成した。また、放送部や写真部が地域のイベントに参加・協力するなど、地域交流が拡充された。長沢にこにこハーモニーについては、地域主催の形で12月に本校で実施し、盛況であった。	①引き続き次年度も協議会や部会において活発な意見交換を行い、活動の充実を図る。 ②次年度も全学年で実施する予定である。今後も、生徒会や部活動等を通して、地域との連携を図っていく。	①学校運営協議会に関わることで、学校の実態を知ることができ、大変有意義な経験となった。また、事前に資料を拝見することで、協議がより深まった。次年度も引き続き学校運営に参画したいと考える。 ②全校生徒による地域美化活動、放送部や写真部の地域イベントの協力、長沢にこにこハーモニーでの会場提供や部活動の参加など、地域貢献活動の充実が図られている。引き続き地域交流をお願いしたい。	①委員の方に学校運営に参画いただき、地域と一体となった特色ある学校づくりを推進することができた。 ②地域貢献活動の実施や各種イベントの参加により地域交流の充実が図れた。	①②引き続き学校運営協議会や地域貢献活動の充実を図るとともに、それらの活動を通して、理数教育の推進やSSHの指定に向けて取組を深めていく。
5	学校管理 学校運営	①一人一台端末を有効活用するための施設・設備等の充実を図る。 ②働き方改革を推進する。在校等時間の縮減にあたっては、全体の時間の効率化と個人の時間の効率化の両立を図る。	①高等学校DX加速化推進事業により、施設・設備等の充実を図る。 ②働き方改革を推進し、教職員のワークライフバランスの充実を通して、業務の効率化を図り、教育力を向上させる。	①各授業において、タッチペン利用とペーパーレスを促進する。視聴覚教室及びICT2教室の整備や特別教室へのプロジェクター型電子黒板の設置等、DX加速化推進事業により、施設・設備等の充実を図る。 ②ノー残業デー、振替ノー残業デーを推進する。スクラップ＆ビルドの視点をもって、業務のスリム化・効率化を図る。	①各授業において、タッチペン利用とペーパーレスを促進できたか。視聴覚教室及びICT2教室の整備や特別教室へのプロジェクター型電子黒板の設置ができたか。 ②ノー残業デー、振替ノー残業デーが徹底できたか。職員の在校等時間が縮減したか。	①総合的な探究の時間においては、ペーパーレスで授業を実施した。タッチペンを導入した1年生では、授業担当者の6割が実施し、ペーパーレスを基本とし、ペーパーレス化を促進した。視聴覚教室及びICT2教室の整備や特別教室に電子黒板機能付きプロジェクターを設置した。 ②管理職が率先してノー残業デーや振替ノー残業デーを推進させた結果、職員の在校時間は縮減している。	①今後も組織的にタッチペン利用とペーパーレスを促進していく。次年度もDX加速化推進事業の継続が予定されており、ICT1教室やパイオ室の整備計画について検討している。 ②次年度に予定されている職員室の設備大幅更新を行う「オフィス改善」を起爆剤に業務のスリム化・効率化を伴った働き方改革を強力に推進し、組織全体の教育力を向上させていく。	①②DX加速化推進事業やオフィス改善等を活かしてSSHの指定につなげていければよいのではないかと。	①タッチペンの利用によるペーパーレス化の促進やDX加速化推進事業による施設・設備の充実ができた。 ②職員の在校時間を縮減することができた。	①SSHの指定に向けて、DX加速化推進事業によるICT1教室やパイオ室の整備を行う。 ②7月に予定されている職員室等の設備更新を基盤として、業務のスリム化と効率化を伴う働き方改革を強力に推進し、組織全体の教育力を一層向上させる。